



## 鶴見良行『ナマコの眼』

### 鈴木佑記

本書は、モノ研究の金字塔である。モノ研究とは、狭義には特定商品の生産から流通、そして消費に至る経済循環を考察するものである。広義には商品を含む様々なモノに着目することで、それに関わる地域社会の歴史や文化を明らかにしようとするものである。鶴見良行はナマコを取り上げることで、単に商品の流通経路を分析するだけでなく、主に東南アジアとオセアニアの島々、それに東アジアの交流史を論じた。

なぜナマコか？そこには鶴見の脱中心的志向性が強く反映していると考えられる。ナマコは砂糖や茶などの世界商品に比べると欧米社会による関与の度合いが低く、記録が断片的である。また生産には辺境に暮らす文字を持たない人々が多く従事してきた。海底に横たわる視覚器官のないナマコから地上を眺めることで、国家と支配者の歴史や文化を逆照射しようとしたのだ。本書は、鶴見がナマコの棲息海域を縦横無尽に歩きながら考え記した、陸本位になりがちな人類への異議申し立ての書なのである。

評者追記：著者の鶴見良行は題目で「語呂合わせ」を意図しており、読者には『ナマコノメ』ではなく『ナマコノマナコ』と読んでもらいたかったというエピソードがあります。



**出典:**

- 鶴見良行 『ナマコの眼』 (筑摩書房、1990年/ちくま学芸文庫、1993年)



マレーシアのペナンでの鶴見良行、1975年1月  
©学校法人立教学院、立教大学共生社会研究センター蔵



フィリピン・スルー海のナマコ突き漁の風景、1987年3月23日  
写真：鶴見良行 ©学校法人立教学院、立教大学共生社会研究センター蔵



インドネシア・スラウェシのナマコ天日干し風景、1986年3月31日  
写真：鶴見良行 ©学校法人立教学院、立教大学共生社会研究センター蔵

## 関連リンク

- 鶴見良行文庫デジタルアーカイブ（立教大学共生社会研究センター）

<http://tsurumi.rcccs.rikkyo.ac.jp/index.html>